半分の世界で

rikuru

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
半分の世界で

【Ｎコード】
Ｎ６１６９Ｙ

【作者名】
ｒｉｋｕｒｕ

【あらすじ】
第２作目。大学生活２年目を平凡に送っていた田川俊は、遠距離でありながらも長年続いている彼女との恋愛関係に幸福感を確かに感じていた。しかし、ある日思いも寄らぬ事態に巻き込まれてしまい、２人の関係に大きな影響をもたらしてしまう事に。その後次々に襲いかかる非現実的な事態に田川俊は、その状態に苦悩しながらも、一つの選択を下す。

11月21日

「じゃあ、また1か月後にね」
「ああ」
その言葉を後に、「俺達」はそれぞれ帰路についた。

加島智香(かしまともか)。彼女とは高校からの付き合いで、父親の仕事の関係上地元から離れる事になり、はや2年が経っていた。
彼女は高校を卒業した直後父親の仕事場付近で就職し、持病で長期入院している母親の為に身を削る思いで働きづめの毎日を送っていた。
熱心に母親の手術代や入院費用を少しでも軽減させようと、それこそ自分の身体は二の次でかけがえのない両親の為なら自分の身を捧げるのを厭わないほど彼女は出来た人間だった。
親の為に掛け持ちでの仕事、更にボランティア活動にまで積極的な彼女は地元の住民からも好感を持たれる存在だった。
高校の時から彼女は周りの人間から慕われた存在だったが、卒業してからより一層人望の厚さに拍車がかかっていた。

そんな彼女と3年以上付き合えている俺は、幸福以外の何者でもないのかもしれない。
普段は身近にいる分実感が沸かないが、この状況を客観的に見て不幸だと思う人間はきっとどこにもいないだろう。

対する俺は彼女のように立派な人間ではなく、親の脛を齧って大学生活2年目をただ平凡に送っていた。
入学当初から一応コンビニでのアルバイトはしているものの、十分な足しにはならなかった。
そもそも実家暮らしの俺は安定した収入源は当面必要がなかった。

欲しい服は買えるし、本も買える、ゲームソフトも買える。
俺はこの生活差に後ろめたさを感じ、彼女に資金援助をしようと何度か試みた事があるが「自分の金は自分で何とかする」と突っ張られてしまった。
彼女は一度腹に決めた事は他人の意見などで覆されないタイプなので、俺が強く言っても考えを捻じ曲げないのだ。
それが魅力だと思う所もあるのだろうけど。
しかし・・・

「おい！」

「・・・・ん？」

強い呼び声によって急に現実に引き戻された。

「いつまでのろけ話聞かせるつもりだよ。もうそれ散々聞いたっつーの」

夢でも幻でもなく、その声の主は大学で知り合った友達、三井知樹（みついともき）だった。
いけないな。最近寝不足だからか、夢と現が明確に判別できない感覚に陥っている。

「ああ・・・1ヶ月ぶりに会ったからな。ちょっと浮かれてたかもしれない、すまん」

そう。「俺達」は遠距離恋愛を続けてはや2年が経過していた。
とはいえ、一般的に？遠距離恋愛？と言われるとピンからキリまであるが、そう考えると俺達はまだマシなのかもしれない。
距離にして俺の自宅から彼女のアパートまで、大凡１００キロ前後

くらいだろう。
しかし距離の問題だけではなく、相手はタイトスケジュールの中都合を合わせる必要だってある。
勿論例外というわけでもないが、俺の周りで誰かと付き合っている友達は数多いが、遠距離恋愛が続いている奴など一人もいない。
過去の話を聞けば、遠距離恋愛などやっても長続きしない、男か女どちらかが寂しさに耐えきれず最終的に浮気に走る、など失敗例ばかりを耳にタコができるほど聞いてきた。
そういった話を身近に聞いてきたのもあり、未だに不安は消えないが、彼女がその辺の女より人一倍信用できるというのもあってここまで続いているのだろう。

「でもさ」

思考している途中で、知樹は割って入るように言った。

「いくら相手がいい子でも、遠距離なんていつ終わるかわかんねーじゃん。あんまり安心しないほうがいいかもしれねーぞ？」

知樹は、いつも俺が浮かれている時にわざと不安にさせるような事を言って煽ったりする。
逆にシリアスな話をしている時は真剣に話を聞いてくれるのだが。
こいつはそういった空気の読み方に関しては上手いのかもしれない。

「いや・・・彼女は、そのへんは大丈夫だよ。第一、あの子は浮気できる性格でもないし、第一そんな暇な時間もない」

そう言うと、知樹は

「でも彼女お前に対してそんな愛情表現とかしてこないんだろ？相

手が2つ年上で大人っつっても、普通彼氏に甘えたりしてくるだろ？」

言い返そうと思ったが、寸前で言葉に詰まってしまった。

「まぁ・・・それは、そうだけど」

確かにそうだ。数年付き合っても、恐らく関係の深さは付き合い始めの頃とあまり変わっていないのかもしれない。
その当時から彼女は俺に対して愛情表現や、弱音を吐くといった事が殆どなく、こう言えば大げさかもしれないが、少し仲がいい程度の友達と接しているのと同じような立ち位置にいると思わせる。
彼女は元々高校の時から誰に対しても分け隔てなく接していて、差別する事もなければされることもなく、どんなタイプの人でも平等に接する事ができるといった人柄の良さを持っている。
しかし、これは恋愛面で言えば、あまりプラスにはならないのかもしれない。
恋愛は理不尽さ、矛盾、偏見、そういった負の要素からも成り立ってしまうものだ、と確かどこかの本に書いてあった。
つまり、俺は彼女に特別扱いをしてもらいたいのかもしれない。
でもそんな事は口に出せる事じゃないと思うし、長年付き合っていて大きな進展が見られない今、半ば断念している所もあるのかもしれない。
彼女は、俺の事を心から好きになってくれているのだろうか。

「おい、悪かったって。まあ人には色んな付き合い方があるもんな」

俺の真剣な表情を察したのか、知樹はさっきより少し言葉を軽くして言った。

「まぁ・・・そりゃ、嫌いでもない人と付き合う訳ない・・・しな」

付き合った年数だけは周りにいる友達でもトップの俺だが、関係の深さを競うなら最下位に位置するかもしれないレベルだ。
長年遠距離をしているせいか、あまり愛情を汲み取る事ができなくなっているのかもしれない。
情けないな、俺。
それに、俺こそ彼女に愛情を与えてやっている事ができているのかハッキリしていないのに。
今更かもしれないけど、今夜電話で智香（ともか）に聞いてみよう。

――――――――帰路。
思えば、俺らは喧嘩もほとんどなかった。
恋愛において異性関係でトラブルになる事はよく聞くが、あいにく女友達と呼べる子すらもいない俺はトラブルの原因となるものがまずないし、智香は職場などで異性と関わる機会はあっても、仕事に力を入れ過ぎて俺以外の異性と仕事以外の話題で話す事自体がほとんどないと言っていたな。
こんなお互いだから、今まで大きな諍いもなく、うまくやってきたのかもしれないけど。
しかし、俺は、もう少し彼女に近づきたい。そう思っていた。

――――――――何故だろう。今日はやけに、智香の声が聞きたい。
１１月２１日水曜日。空を見上げるとこの日は満月だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6169y/

半分の世界で

2011年11月18日21時28分発行